桂木のタブノキ林

特集　山のある町

埼玉県の南西部に位置する毛呂山町。町の西部に広がる山地は、標高約 300 ～ 400m で、外秩父山地の東縁部にあたります。私たちの町は、総面積 34.04 ㎢のうち約 40%が山林にあたるという山が多い町なのです。

森の恩恵

一般的に森は、多種多様な動植物を育み、二酸化炭素を吸収して地球温暖化の防止に役立っています。また、土砂の流出を防いだり、渇水（かっすい）や洪水を緩和したりと、治水の働きもしています。私たちが生活するうえで、森から様ざまな恩恵を受けていることは、皆さんもご存じのことでしょう。

私たちが森から様ざまな恩恵をもたらしてもらうためには、森の整備が不可欠となります。しかし現在、全国的に森の整備が追い付かず、十分に機能していない森が見られます。

恩恵をもたらす森

では、私たちに恩恵をもたらしてくれる森とはどのような森なのでしょうか。

森が良好な状態であるためには、植える、育てる、伐採する、使うといったサイクルが正常に働く必要があります。このサイクルが正常でないと、良い森ではなくなります。良い状態でない森とは、木材の需要が少ないため木の伐採ができず、間伐もできないために植林もできないという、人の手が付けられない森のことを指します。この様な森の場合、間伐が行われないため、木々の間に太陽が入らず、下草が生えなくなってしまいます。そうすると、雨が地面に浸み込みづらくなり、水は地表を流れ、地面の土が浸食されてしまい、土砂崩れの原因になってしまうこともあるのです。

毛呂山町の「山」

では、私たちの暮らす毛呂山町の「山」の現状はどのようになっているのでしょうか。実は、町内にも様ざまな理由で、管理が行き届かない森が見られます。実際、山を訪れても、山の状態まで見る人は、少ないのではないでしょうか。

山は私たちの生活に様ざまな恩恵をもたらしてくれます。しかし、山の現状を知らない私たちは、どのようにすれば山のことを知ることができるのでしょうか。また、私たちはどのように山に接していけばいいのでしょうか。

今回の特集では、毛呂山町の「山」の現状を知り、私たち一人ひとりができることを考えてみたいと思います。

奥武蔵自然歩道は、毛呂山町の鎌北湖から飯能市の天覧山を結ぶ全長約 11 キロメートルのハイキングコース。道は整備されていて歩きやすい。

晴れた日には、木々の間から差し込む木漏れ日や森を吹き抜ける風が心地よい。

宿谷の滝へと向かう道。道の脇を宿谷川が流れ、夏はとても涼しい。

金毘羅（こんぴらさま）様のスダジイ
（滝ノ入）

町内には、巨木と呼ばれる木が何か所かに点在している。この木もそのひとつ。

学ぶ 1
～Learn～

熱心に授業に取り組む児童たち

森がある小学校

毛呂山町立光山小学校は、町内4小学校のなかで唯一校内に「森」を有する小学校です。この森は「ほうたんの森」と呼ばれています。

現在、光山小学校が建っている場所は光山坊と呼ばれていたといわれています。その「コウザンボウ」が地元では「ホウタンボウ」と呼ばれていました。「ほうたんの森」はこの地名に由来しています。

昭和50年の開校後、昭和55年に整備された「ほうたんの森」は、理科や総合的学習の場として、また児童の遊び場として利用されています。

森での授業

この日の授業は、ビニール袋を使って森の付近の空気を収集し、気体検知管でその中の酸素の量と二酸化炭素の量を量るというものでした。子どもたちは班ごとに分かれ、それぞれに実験を行いました。

ほうたんの森

実験の結果

実験では、あらかじめ先生が森のないところで測定した数値と、森の近くで測定した数値を比較することにより、森の近くで測定した数値の方が、酸素の濃度が高くなるといったことがわかりました。

植物は、日光が当たると光合成をします。その過程で大気中の二酸化炭素を吸収し、酸素を排出します。この日の子どもたちは、実験をとおして、そのことを理解したようです。

体験することは、「学び」にとって、とても重要です。光山小学校では、森を上手に活用し、子どもたちの「学び」を刺激する授業を行っています。

遠藤　美優（みゆ）さん
（光山小学校６年）

いつも「ほうたんの森」で遊んでいますが、今回の実験で森が酸素をたくさん出してくれているのがわかり、改めて「ほうたんの森」はすごいと思いました。

小山　息吹（いぶき）くん
（光山小学校６年）

「ほうたんの森」での授業は、いろいろな授業のなかでも楽しみな授業です。光山小学校には、「ほうたんの森」があるので、街中よりも空気がいい感じがします。

木造の保育園

毛呂山町立ゆずの里保育園は、平成25年4月に子育て支援センターを併設した保育園として開園しました。

４０００平方メートルを超える敷地には、保育室や子育て支援センターのほか、一時保育室や病後児保育室なども兼ね備えています。そして広いフリースペース、芝生が張られた園庭など、子どもたちが伸び伸びと過ごせる空間が広がっています。この敷地で子どもたちは、日々健やかに保育を受けています。

そして、ゆずの里保育園の最大の特徴は、比企郡ときがわ町産の木材を使用した木造の建物ということです。フリースペースには直径約60センチメートルの柱を配し、子どもたちが常に木と触れ合うことができるようになっています。

広い園舎で遊ぶ園児たち

2 使う ～Use～

ゆずの里保育園

なぜ木造なのか？

では、なぜ木造の保育園が建築されたのでしょうか。

そのひとつに、子どもたちに木の温もりを感じる園舎で育ってほしいという想いがありました。木は、人にとって、温かく、優しく感じられる存在であり、その香りや美しい木目は、人の心を落ち着かせてくれます。子どもたちに、優しく、健やかに、そして木のように伸び伸びと育ってもらいたいとの願いが込められ、木造の園舎が建築されました。

自然が多い毛呂山町の保育園として、平成25年に誕生したゆずの里保育園。これから幾年にもわたって、たくさんの子どもたちが巣立っていくことでしょう。この園で学んだことを活かし、元気よく育っていってもらいたいものです。

内田　清美（きよみ）さん
悠葵（はるき）くん

ゆずの里保育園は、敷地が広いだけでなく、園舎も温かみを感じる作りで、私も息子もとても気に入っています。

ゆずの里保育園の良いところのひとつとして、木の温もりを感じることができる園舎にあると思います。私は子育てには、ある程度の自然が必要であると考えています。木や森に囲まれ空気の良い所で伸び伸びと子どもを育てることができる環境には大変満足しています。息子が、保育園でめいっぱい遊んできて、楽しかった話をたくさんしてくれたときには、私も嬉しくなります。

緑の募金

公益社団法人埼玉県緑化推進委員会では、緑に親しむことで健全で豊かな心を育むとともに、緑豊かな住みよい県づくりを進めるため、緑の募金活動を推進しています。

緑の募金は、街頭・家庭・職場などで寄附を募り、募金者には、緑の羽根などが配布されます。

この事業で集められた募金は、森林整備や身近な緑化活動（学校、公園などの公共施設への植樹や苗木の配布）への資金や学校環境緑化コンクール、ポスター原画コンクールなどのほか、緑化ボランティア団体や緑の少年団などへの支援や助成などに活かされています。また、緑化の国際協力事業や東日本大震災被災地域緑化復興事業の支援も行っています。

稲垣　結平（きっぺい）くん
（毛呂山中学校１年）

総合公園は、運動するためによく利用しています。今回、桜を植えたことは、いい経験になりました。総合公園が桜でいっぱいになれば、運動する人も楽しめると思います。

村田　莉奈（りな）さん
（毛呂山中学校１年）

記念のプレートを皆で作成したことが思い出に残っています。緑の木を植えることも大切だと思いますが、桜を植えれば、毛呂山町がもっと鮮やかになると思います。

植える ～Plant～ 3

桜の植樹体験をした毛呂山小学校6年生（平成２６年３月）

毛呂山町での取組

毛呂山町では、毎年5月ごろ、町民の皆さんに緑の募金をお願いしています。そして集まった募金を利用して、公園や公共施設、町内の小・中学校にツツジや桜などの植樹、また山林の草刈り作業などを行い、身近な緑化活動を行っています。

平成25年度には、皆さんよりご協力をいただいた緑の募金を活用し、少しでも多くの人が緑に親しめるようにと、桜の植樹を行いました。

桜の植樹

この植樹は、総合公園グラウンドの南側の斜面を利用し、しだれ桜を植樹するというもので、卒業を控えた、毛呂山小学校の6年生にお願いしました。これは、植樹する児童の記念になる事に加え、将来大人になっても毛呂山町を大切にする気持ちを持ち続けてもらうことを目的に始められました。

桜の植樹は、今年度以降も継続して、各小学校が順番で行っていく予定です。

ハイキングのススメ

近年の健康志向も相まって、個人でウォーキングやハイキングを楽しむ人が増えています。習慣的に歩くことは、骨粗鬆症（こつそしょうしょう）や糖尿病、高血圧、体の老化などを防ぎ、血行促進・脳の活性化などの効果があるといわれています。歩くことは、楽しみながら自身の健康や体力の向上にもつながる、最も有効的な有酸素運動なのです。

また、県立黒山自然公園のある毛呂山町は、自然の宝庫。少し歩けば日常と違う風景に出会えます。たまには足を延ばして、山の方へハイキングに出かけてみませんか。

毛呂山町のハイキング道

町内には、奥武蔵自然歩道やゆずの散歩道など様ざまなハイキングコースがあります。しかも家族で楽しめるコースから、ベテラン向きのコースまでバラエティに富んでいます。しかもコースは程よく整備されていて、道標も継続的に設置や付け替えを行っていますので、安心してハイキングを楽しむことができます。

4 楽しむ ～Enjoy～

可愛らしい花にも出会える

お勧めのハイキングコース

まず奥武蔵自然歩道です。鎌北湖を起点として歩けば、山道で森林浴をしながら健康な汗をかき、道中の宿谷の滝では、清流遊びも楽しめます。

また、ＪＲ毛呂駅から桂木観音を目指す、ゆずの散歩道は、秋にぴったりのコースです。沿道にはゆず畑が広がり、秋には黄金色（こがねいろ）の実をつけ、紅葉の里山とともに、美しい風景を形成しています。また、桂木観音下の展望台からは、よく晴れた日には、遠く東京スカイツリーを望むことができ、近年、多くの人が訪れています。

なおハイキングマップは、役場産業振興課で入手できます。

毛呂山町体育協会山岳部の皆さん
（左から）本多庸輔（ようすけ）部長、平野新一さん、
藤野惠子さん、島野邦子さん、西田（さいだ）喜久子さん

町内には、様ざまなハイキングコースが整備されていて、体力に自信がある人も、そうでない人も楽しめると思います。一歩山の中に入ると、きれいな緑があふれていて、街中では感じられない風を感じることができます。健康増進のため、ストレスの発散のために、ぜひ山歩きをお勧めします。

ワイヤー使い、周囲に細心の注意を払いながら、引き倒す。

成長させても木材として需要価値が低い木を選び間伐する。間伐する木に引き倒すためのワイヤーを括り付ける。

木を倒すため、まず倒す方に浅く切り込みを入れ、その後反対側から深く切り込みを入れていく。

巻き枯らし

木の皮をむき、木を枯らすことで間伐する方法。

守る 5
～Defend～

山は季節の移ろいを感じさせてくれます

「毛呂山町で、山を維持管理している人は、かなり減ってしまいました。私を入れても数人しか残っていないのではないでしょうか。

その原因としては、木が売れにくくなったことや、仕事が重労働であることなどが考えられます。

以前は、住宅の建築材のほか足場材など様ざまなものに使用されていたのですが、安価な外国産の材木が大量に入ってくるようになったことで、国産材の需要はめっきり減ってしまいました。また、木の育成には、長い年月がかかります。植林は、約100年先を見越して行います。優良材にするため、下草刈りや枝打ち、除伐、間伐など数年間隔で繰り返すことは大変な作業です。最近では、ニホンジカによる食害も広がっています。こういった環境が改善されない限り、林業で生計を立てるのは、難しくなりました。

近年、間伐材は山に集積するか、自宅で薪に使う程度になってしまいましたが、元気なうちは山の作業を続けたいと思っています。山仕事は大変な作業ですが、山は季節の移ろいなど、本当に色いろなことを感じさせてくれます。毛呂山町にはこれだけ山があるのですから、もっともっと皆さんに親しんでもらいたいと思います。」

市川豊勝さん（権現堂）

西川広域森林組合
　飯能市、日高市、毛呂山町、越生町を管轄し、植林、伐採・間伐、枝打ち、獣害対策、森林相談など山林に関する様ざまな業務を行っている。

西川広域森林組合（飯能市）

現状打破の必要性

「現在、木材の価格が安くなってしまっていることが、大きな問題のひとつです。林業だけを生業とすることが困難になったため、放置され、荒廃してしまっている山も少なくありません。
　木を植えるだけでは、いい山にはなりません。まずは、ちゃんとした伐採をする必要があります。そのためには木材の販路をしっかりと考えなければいけません。しっかり整備された山は、住民を災害から守るといった役割もあります。組合はこれからも山を守り、住民の生活を守るために努力を続けます。」

西川広域森林組合　小池昇　組合長

山の魅力を知ってもらいたい

「山を救うためには、個人が意識することも重要な要素のひとつです。山に関心をもってもらうために、人が山と親しめるような場所やイベントを提供することも大切だと考えます。例えばエコツーリズムなどを企画し、山を体感してもらうこともいいと思います。
　山は訪れるだけで、いい空気を味わえますし、歩いて汗をかけば健康にもつながります。毛呂山町にも身近に訪れることができる山があります。ぜひ積極的に身近な山に足を運んでもらいたいと思います。」

西川広域森林組合　細田晃宏（あきひろ）　課長

毛呂山町権現堂にある「学校山林」へは、西武秩父線武蔵横手駅から約40分程度かけて徒歩で行く。

「間伐体験」では、２代にわたって森林管理をしてくれている駒井さん（日高市）から、木の見定め方法や切り倒し方を指導してもらい、皆で協力して木を切り倒す。

東京都練馬区に所在する武蔵大学江古田キャンパスには、都心とは思えないほど緑があふれている。

考える ～Think～ 6

武蔵大学基礎教育センター「学校山林間伐体験」

旧制武蔵高校の生徒が、昭和15年に毛呂山町大字権現堂地内に植林したのが「学校山林」で、現在は、毎年２回、教員・学生・卒業生などで樹木の調査や間伐体験を行っている。今回お話を伺った丸橋教授は、平成５年から毎年「学校山林間伐体験」を指導しているという。

「学校山林は、70年以上もの長い年月にわたり、人手をかけ維持されてきました。そこは行くだけでも当時の人たちの思いを感じることができる場所です。私は、学生に学校山林から自然科学だけでなく、経済学や社会学など様ざまなことを学び取ってもらいたいと考えています。樹木は、短い時間では成長できません。長い年月をかけて太い幹を形成していきます。短いスケールに翻弄（ほんろう）されずに生きていくための、指針を得てもらいたいと考えています。

現在、木材の市場取引価格は、相当低い。本来、人と木の良好な関係には、植える・育てる・切る・売るの一連のサイクルが正常に働くことが必要です。現在は、そのサイクルが回らない社会経済状況となっています。しかし、山林が自然循環にはなくてはならないものであるのは、周知の事実です。

そこで重要となってくるのが、長いスパンで将来を見据える目だと考えます。もしかして、数十年後には、材木が安価で手に入らなくなるかもしれない。そういった視点で考えれば、現在の荒れた山林も大切な資産なのです。個人の問題だと考えず、これからは、官民一体となって、山林を多様な視点で有効に活用する方策を講じ、いかにして後世へと残していくかを考える必要があります。」

武蔵大学　丸橋珠樹（まるはしたまき）　教授

現在、山の後継者が不足して、山の維持管理が難しくなっています。木材の価格が下落しているうえ、重労働な山仕事に就く人も少なくなっています。また、これまで維持管理をしてきた人たちも高齢化が進み、手入れができなくなってきています。

山は、私たちに様ざまな恩恵をもたらしてくれています。しかし、良い森であるためのサイクルが円滑でないと、山の荒廃は進み、これまでもたらしてくれていた恩恵を受けることが難しくなります。現在、そのような現状を変えるために様ざまな分野の人が対策を行っています。では、私たち個人は、山にどのように関わっていけばよいのでしょうか。山に親しむこと、山を知ることなど、できることは小さくても、それを行うことが重要なのかも知れません。

今を生きる子どもたちが、将来にわたって山の恩恵を受け続けていくために「山のある町」の住民である私たちができること、町としてできることを、今一度考えてみる必要があるのではないでしょうか。